

## Viva a Ópera, Viva a vida!

東京司法書士協同組合  
理事長  
倉石 裕子



東京フィルゆかりの方々に、クラシック音楽に魅了されたきっかけや音楽生活について綴っていただく本連載。第18回は、2022年に創立50周年を迎えた東京司法書士協同組合の理事長を務める倉石裕子様。パートナー会員として東京フィルをご支援いただいています。ブラジル・マナウスでの思い出やオペラとの出会い、楽団員との交流を綴っていただきました。

密林の中、アマゾン川を下るボート。乗っているのはルチアーノ・パヴァロッティ。1995年、ブエノスアイレスでのコンサート翌日、100年前にカレーソーが歌った劇場を訪ねたいと、ブラジル・マナウスのオペラハウス「アマゾナス劇場」に向かう……パヴァロッティの人生を追ったドキュメンタリー映画『太陽のテノール』(2019年)のワンシーンです。

私は20代の7年間、旅行社の仕事を時折手伝いながら、マナウスに暮らしていました。19世紀にゴム景気で栄えた大都会です。当時建設されたのがアマゾナス劇場。フランスのオペラ劇場を模したルネッサンス様式の建物で、中に入ると美しい天井に目を奪われます。ここはマナウスの重要な観光スポットでもあり、私も日本からの観光客をよく案内しました。残念ながら、わたしの在住中はずっと修復中だったのでオペラ公演はなく、街にあふれるサンバばかりを聴く日々でしたが。

しかし最近、オペラにハマっています。交友のある東京フィルメンバーからお誘いを受けて、定期演奏会に行くようになったことが

アマゾナス劇場は外観のみならず劇場内の装飾も  
きらびやか  
©A.Kajisako



きっかけです。2018年5月の『フィデリオ』(演奏会形式)では感動し、ドン・フェルナンド役のバリトン歌手・小森輝彦さんのファンになりました。そして、同じく東京フィルが演奏する新国立劇場オペラ『ドン・パスクワレ』が、オペラの虜となる決定打に。今やエレベーターで一人のときなどは、『ハバネラ』を歌い上げ、高音を出すことは喉を鍛え誤嚥予防にもなると悦に入っているほどです。

また、クラシックの魅力を知ってもらえたらと思い、東京フィルメンバーとのミニコンサートを企画してきました。多彩なアーティストをお招きしてのオペラ・アリアコンサートや「アメイジング・グレース」の胸に沁みる演奏は思い出深いです。

この映画の最後に、パヴァロッティは「どうかわたしを愛し続けてくれ。今日は愛せなくても明日がある」と語っています。名劇場のそばに暮らしていながらオペラ愛には遠かったブラジル時代の私に伝えたい言葉です。愛と音楽に満ちた世界であることを願います。そして、微力ですが東京フィルハーモニー交響楽団と音楽活動を応援し演奏会に通い続けたいと思います。



過去のミニコンサートでは、ソプラノ・木下美穂子氏、バリトン・小森輝彦氏をゲストに迎え、辻博之氏の指揮のもと、東京フィル楽団員の近藤(コンサートマスター)、古田、山内、吉岡らが演奏に参加した

倉石 裕子(くらし ゆうこ) / 神奈川県生まれ、上智大学外国学部卒業。ブラジル・マナウス在住中は、ATSTUR社にてインバウンドやチケット手配など幅広い業務を行う。現在、東京司法書士協同組合理事長。司法書士。